

---

# 古の黒龍と復讐の魔導師（タイトル検討中）

シャルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古の黒龍と復讐の魔導師（タイトル検討中）

### 【NZコード】

N6183Z

### 【作者名】

シャルル

### 【あらすじ】

遠い過去、人は剣を持ち魔法を駆使して魔物たちと戦っていた。人は魔法と共に存し、強者は弱きを守り互いに助けあつて生きていたという。

しかし21世紀になつた今、人類は持つものと持たざる者で別れ敗者を虜げ、勝者は絶対的な権力を振りかざし、より力あるものが生きやすく、力なきものは一日の食料を得るのにも苦労する

そんな狂つた世界。それが、彼の生まれた世界だった。

黒龍を使い魔として使い、膨大な魔力を所有する

ルイス、彼の生き様を書き記す作品。

## 始まりは少女のために

遠い過去、人は剣を持ち魔法を駆使して魔物たちと戦っていた。人は魔法と共に存し、強者は弱きを守り互いに助けあって生きていたという。

しかし21世紀になつた今、人類は持つものと持たざる者で別れ敗者を虜げ、勝者は絶対的な権力を振りかざし、より力あるものが生きやすく、力なきものは一日の食料を得るのにも苦労するそんな狂つた世界。それが、彼の生まれた世界だった。

いつの頃だつただろうか。

死ぬことや生きることに執着がなくなつてしまつたのは。世界がどれほどひどくとも受け入れてしまつようになつたのは。人は殻に閉じこもると、未来の光を見失つてしまつ。理解することをやめてしまつ。

全てを諦めてしまつ。

遙か昔に未来を見ることをルイスは諦めてしまつた。俺は諦めてしまつた。

だから……。

なのに……。

「おいおい……なんだお前は？」

声は夕暮れの光がわずかに漏れる高層ビルの佇む歩道で響いた。白金の髪を描きながらルイスは目の前に佇む男を見た。俺は何をやつているんだ。

「いや……なんていうかどうしてこうなつたんだろうね？」と、答える。

それに男が、

「は？」

なんて声を上げて、ルイスの首元を見ると、  
「お前、俺達に逆らつてただで済むとでもおもつてんのか？」

魔法を使えない無能者のお前が

嘲笑うよつにして男は低い声で言つてくる。

それにルイスは、

「自分でもどうしてこんな行動に出たのかびつくりしてるんだよね  
遠い昔にいづこいつ気持ちは捨てたはずなのにね……どうしてだろ  
う？」

なんて言つてみたりする。

それに、男が吐き捨てるよつして言つ。

「知るか！ そんなことよりもおとなしくその後の女をよじせー！  
その女も俺たちのおもちゃになることを望んでる。

朝昼晩飯付き、それに寝床まで用意してやろうつと言つてこいるんだ  
この世の中、最高の条件だと思うがな

食べることができて、寝る場所も困らない。それがもしも男に提示  
された条件なら

それは本当に良い条件なのかもしれない。

しかし、求められているのは女。

その仕事は言つまでもなく性的な目的の物。

この世界ではよくある事、よくあることなのだ。

ただ、今日、この場所で見てしまったから。

出会つてしまつたから。

ルイスは一瞬背後で縮み上がつて、桃色の髪の少女を  
眺めて、頭を描きながら言つた。

「俺つて迷惑だつた？」

それに女は首を左右に降つた。

その表情は助けて欲しいと訴えている。

同時に思ひだしてしまつ。

同時に考へてしまつ。

彼女の顔は、雰囲気は、あまりにも似ていたから。

だから、ルイスは彼女を救いたと思った。

救えなかつた彼女と瓜二つの人の面影と重ねて

助けよつと思つた。

そこで、彼は男に向かつて言つてみる。

「彼女はどうやらさあー君たちについていく気はないらしいよ？

それでも無理やり連れて行くの？」

それに男は鼻で笑つて答える。

「今は照れてるのさ、連れていけば自分から求めるようになる。最高の気分でな、フツフツフ、フハハハ」

「照れてるね……ずいぶんと嫌そうに照れる人もいるもんだまあー俺には彼女が嫌がつてるようにしか見えないけど」

そんな風に言つと、男は笑うのをやめて鋭い目付きになる。

「ああーめんどくせえーもうお前と話すのがめんどくさくなつてきたいつその事ここで殺しとくか」

ため息を混じりに男が空中に手を走らせるのが見えた。

それは魔方陣を描く下準備、空中に手を走らせ魔法の通り道を作

る

作ると、すぐに体の核から生まれる魔力を魔方陣に走らせ魔法の発動条件を整えるのだ。第一段階は白色、第二段階は緑色に変化する。

緑色に変化した魔方陣には、すでに埋め込んだ式が刻まれてあり知識があるものなら見ぬくこともできる。すでに映り込む男の手の先には

緑色の魔方陣が構築され、第三段階に移行しようとしていた。  
第二段階、魔方陣に閃光が走り、橢円の中央の式が回転し言葉を口にすると、その中心から魔法が生まれ、発動する。  
そんな魔方陣を構築する男を見据えてルイスは、

「……」

じつくりと見た、放たれる瞬間を、構成を、男の目を、

一つ一つ釘いるようにして。

「弾けろ！ 雷花！」  
イルミナ

男がそつと言つた瞬間魔方陣の中心から青色の光が生まれ一理の花のようにな

姿を変えると、瞬間、花が散り、加速してルイスの方向に放たれた。

その姿はまるで青色の花が散るような美しいものだつた。

だからこそ、人はそれを雷花と名付けた。

しかし、美しいものには棘がある。当たれば刃と化した花が体に突き刺さり

細胞を破壊し、全身に電流を走らせる。

だが、それをルイスは避けない。

避けようとしている。

向かってくる狂氣を帶びた光に右手を差し出して前を見る。絶望と共に振ることをやめた、ソレをするために準備をする。数秒後、ルイスは光に包まれた。

同時に空間に風が巻き起こり、周囲の物を吹き飛ばしていく。巻き上がる砂煙の中、男の声が漏れた。

「クハハ、確実に死んだなこりやー魔導師に歯向かうから死ぬはめになるんだよ。弱者は俺達に従つてればいいんだ」だが、それに言葉が帰る。

砂煙の中、その声は男の前から漏れた。

「悪いけど……死んでないみたいだよ？ ホラ、ていうか無傷？」頭をかきながらそう言つてみたりする。

それに全身を確認するように男はこちらを見て。

「お前……いつたい何をした？」

「簡単。魔法で魔法を打ち消しただけの話

「魔法だと……？ ふざけるな！ そんな冗談信じると思うのか？」

魔法を使えるならお前はなぜ魔導師の証を所持していない？

所持していれば虐げられることもなく最高の教育と最高の地位を得ることができるものだぞ？ それをしないということはお前が魔

導師で

ない証拠、お前が魔法を使えるはずはない」  
手で畠を斬つてそう言い切る男を見てルイスは、  
「ああーアレね……ずいぶん昔に捨てたよ。俺には  
アレはいらないものだから」

どこか悲しげな表情を浮かべてそう言った。

魔導師の証、それは子供の頃魔導師の素質を調べ  
基準値に達したものに与えられる証。

それを捨てるなど、地位を自ら奴隸に落とすようなモノ。  
だが、それをルイスは捨てた。  
なんの躊躇もなく捨てた。

それが正しいと思ったから、だから捨てたんだ。

「捨てただと？ ふざけるな！ そんなに軽いものではないんだよ  
魔導師の証は！」

茶の髪が風に揺れ、男がそう言つてみると紡ぐようにして再び声  
を漏らした。

「ジャック、出てこい！ 狩りの時間だ！」

その声と共に男の背後から赤色の毛並みの  
犬のような姿をした、口から火を吐く魔物が現れる。  
それを見てルイスは、

「使い魔か、でもすぐに収めたほうがいいよ？」

そう言つてみるが、男は使い魔に命令してこちらに火を噴く魔物  
を仕向けてくる。

同時に男は魔方陣を展開させ、空に素早く手を走らせていく。

だが、ルイスは段階を踏んで変化する魔方陣を見るわけでも魔物  
を見るわけでもなく

ただ、背後から現れた黒き羽を持つ物を見据えて、

「……すべてを飲み込む闇、暗闇の伝説。終わりの存在  
もう止める」とはできない。アイツは標的を見つけた  
そう言つ。

魔法の迫る方向に背を向けてそんな風に言つと  
背後で魔物のもがき苦しむ刹那の音と、犬が骨を  
砕くような音が漏れ出ると、男の悲鳴が響いた。

「う、うああああああ」

使い魔とは術者と血の契約を行い、魔力を高めたり  
ガードとして主人に使える魔獸の事を言つ。

使い魔は魔導師の魔導の核と同調し

主人が死せる時主の核を喰らいその姿を消す。

しかし、使い魔が先に死んでしまうとその契約者は

使い魔と共に命を落としてしまう。

なのに、術者は使い魔と契約する。

メリットがあまりにも大きいからだ。

魔力の増強、威力の拡大。守護の役割。

魔術師の欠点をカバーするその存在は絶対に必要な存在だからだ。  
それがたとえ死んでしまう可能性を秘めた諸刃の剣で合つたとしても

魔導師は使い魔と契約するのだ。

ルイスは目を見開き、こちらを見てくる女を見据えて  
優しげな声で口を開いた。

「君の家はどこ？　俺がそこまで送つて行つてあげるよ  
それに女は、

「……」

答えない。

口を動かそうとしない。

ただ怯えるようにしてこちらを見てくる。  
それにルイスは、

「うーん、俺が魔導師だから？」

そんなことを言つてみる。

それに女はゆっくりと頷いた。

「魔導師だから……か。 そうだよな

魔導師は君たちにとつては恐怖の対象でしかない。でも俺は少なくとも魔導師だからって威張つたり君たちの事を馬鹿になんてしない……俺は差別とか嫌いだから。それに昔、注意されたんだ君によく似た人に……ルイスは昔の事を僅かに頭によぎらせて彼女に微笑をかける。彼女はそれを見てわずかに表情を緩ませるが、まだ警戒は溶けていない。

それを見て、更にルイスは続けた。

「俺が怖いなら別にそれでもいい、でも

君をこのままここへ残していくのもなんか……

なんて言つか……」

照れくさそうにルイスはそう言つてみる。

それを聞いた彼女はどこかわずかに笑いながら、「心配……？」

ルイスは彼女の口から漏れた何気ない一言に驚き同時に頬を人差し指で撫でながらそっぽを向いて言つた。

「うん、まあーそうなんだよ。心配なんだ

安全な場所まで俺に守らせてくないかな？

君を……」

守る、自ら言つたその言葉にルイスの心は揺れていた。かつて守れなかつたモノ、その存在の姿が脳裏によぎる血に染まる地面、横たわる冷えた人の肌の感触。

すべてが、過去に起きた過去の出来事。遠い昔の事。

なのに思い出すたびに脳裏に体に彼女の顔が彼女のぬくもりが蘇つてくる。忘れるなと彼女が言つてゐるよつに蘇つてくるんだ。それを感じるたびに苦しくなる。

張り裂けそうになる。

自分を殺したくなる。

そんな気持ちを押し殺して、ルイスは彼女の顔を見た。

昔、救えなかつた存在に似た彼女を、

すると、その彼女の口元がわずかに緩み、言葉がじりじりと向かう

れた。

「……なら、家まで守つてくれさー」……」

彼女はそう言つてルイスを見る。

それにルイスは、

「いいのか……？」

「うん、守つてくれた貴方だから、それに……」

「それに？」

彼女はそう言つと、つむいで、

「……」

何も口にしなかった。

それを見て得意でもない笑顔を作つてみたりして、

「それにの後が気になるけど、言いたくないなら別にいいよ」

始まりは少女のために（後書き）

長文申し訳ない。猫の小説も次期に更新します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6183z/>

---

古の黒龍と復讐の魔導師（タイトル検討中）

2011年12月20日20時57分発行